チャラ男のデカチンポの
虜になったお母さん
～狂乱ヤリまくり編～

犬文庫　０１７

この作品はフィクションです。
実在の人物・団体・事件等とは関係ありません。
また、登場人物は全員十八歳以上です。

昼下がりの喫茶店で、二人のお母さんが向かい合っていた。艶やかなストレートのショートボブヘアーに、知的そうな眼鏡をかけ、どこか妖しい空気感も併せ持つ茂野美佐枝と、耳が出るくらいのシンプルな黒髪ショートカットで、目鼻立ちがキリッと凛々しく中性的な印象漂う谷山千尋の二人である。学生時代の同級生で、お互い母となった今も友人関係は続いている。共に四十歳だ。

「それで…テルくんと…その…デートしたんだけどね…」

千尋は見るからに言いにくそうに話す。不貞の記録で脅迫されていた美佐枝を救うべく、テルからの要求に応じ、千尋は彼とデートしたのだった。

今日はその後の一連を報告するために、千尋は美佐枝を呼び出したのだった。

「その…あの……ごめん……美佐枝」

千尋は、思い切って年来の親友に告白する。
出来る限り、下品な表現で。
「私も…その…テルくんと……パコっちゃいました」
美佐枝が目を丸くするのがわかった。
「それで、はあ…正直言うと…私も彼の…最高デカチンポにドハマリしちゃってね…ああ…その後も…何回もエッチして…なんていうか…て…テルくんの女になって…今…普通に不倫しまくってます…あぁ…美佐枝を助けるはずだったのに…ごめんなさい…」
千尋は頭を下げた。自らの恥部を親友に晒すのは恥ずかしかったが、そんな醜い自分に対する破滅的な快感を、確かに自覚していた。
「……あは…やっぱり♪…謝らなくてもいいわよ、千尋」
美佐枝の軽やかに笑うような声に、千尋は顔を上げた。彼女は正面で、どこか淫猥な香りの

する笑みを浮かべていた。
「ううん…私の方こそ…謝らなきゃいけないの…千尋にあんなこと頼んでおきながら…私…あの後もテルくんと切れてなくてね…私も…普通に不倫しまくっちゃってたの…しかも脅されたくせに…あろうことか…あれ以降も平気でハメ撮りとかしちゃってたの…あは♪最低でしょ？」
「はあ！」
暴かれた事実に、千尋は思わず声を出す。
美佐枝は続ける。
「ああ…やっぱり私…彼との不倫…やめられそうにないのよ…例え家族にバレる危険があったとしても…自分の甥っ子なのに…どうしても不倫…やめられない…ああ…それくらい最高なのよ…彼の…チンポ」
熱に浮かされたような親友の言葉に、千尋はおおいに共感する。

「わかる！わかるわよ！もう超わかるわよ、美佐枝！ホント…私もどうでもよくなっちゃった…家族とか…人生とか…そんなんどうでもいいから、ひたすら彼のチンポ食ってたい！このチンポとマンコだけしていたい！ハメハメパコパコだけしていたい！そう思うようになっちゃった！」

「きゃは♪やばぁ～い♪私と一緒じゃん、千尋？あは♪でも千尋って、そんなにスケベだったっけ？もっと真面目じゃなかった？」

「はぁ…元々は真面目だったわよ…性にも奥手な方だった…でも彼のチンポに……超スケベにされちゃった(笑)♪あは♪今ではわたくし…チンポのことしか考えられない、人類最強のドスケベ猿でございます(笑)」

「あはは！すごっ！でも…私も同じよ…スケベ…もう超～～スケベよ…大好き…チンポ大好きなの…」

「うん、私も！チンポ大好き！チンポ大大大大大好き！チンポなしではもう生きられない！チンポ！チンポチンポチンポチンポチンポ！」

シックな喫茶店の店内で、二人のお母さんは平気で卑猥な単語を連発させていた。そうやって常識の枠から自ら淫らにはみ出すことに、愚かな興奮を覚えていた。そしてそれを親友と共有していることが、二人揃って人の道を見事に踏み外していることが、彼女達にとってはなにより爽快なのだった。

美佐枝が言う。知的な眼鏡の奥に、扇情的な表情を作って。

「あは♪じゃあさ、もう家族とか完全に無視しちゃって、二人でテルくんと最低ドスケベ不倫しまくろうよ？」

「賛成～♪あは♪私、もうヤリまくっちゃうわ！あは♪家族とか、息子とか、マジどうでもいいし！」

「うん、同意！完全同意！息子なんて、チンポのためなら、もう余裕で捨てちゃいまぁ～～す♪」

「きゃは！すげえ、美佐枝ウケる！私も～♪私も～チンポのためにぃ～息子とか～軽ぅ～く捨てちゃいまぁ～～す☆☆☆あはははは！」

「きゃはははは！やっぱお母さんにとっては、息子よりチンポだよね、千尋？」

「そうよ美佐枝！家族より、息子より、大切なのはチンポ！一番大切なのはデカチンポよ！これが世界の真実！お母さんの絶対真理なのよ！」

「あはははは！よし、じゃあ世界の真理に則って、最低エロエロ不倫！やりまくりますか？」

「うん！やりまくる！やってやってやりまくるわ！お母さん！チンポしまくる！チンポしてチンポしてチンポしまくるわ！ああ！チンポ！チンポチンポチンポ！」

「きゃは！チンポ！チンポいくわよ！もうチンポいっちゃうわよ！チンポガンガンいっちゃう！チンポチンポ！チンポよ！チンポよぉ〜〜！」

平日昼間の喫茶店で、お母さん達は、高らかに宣言していた。

二人の会話をたまたま耳にした人がいたならば、例外なく、そこに狂気を感じ取ることだろう。二人自身も、その狂気を自覚していた。だが、親友にも自分と同じ狂気が内在すると確信するからこそ、彼女達はそれぞれ、こんなにも楽しそうにしていられるのだった。

安心して、狂うことが出来るのだった…。

※※※

「…お、よしよし上手くいったみてえだ！え～初めて配信すんだけど、もう結構な人が見てるみてえだな。ひひ、これ見てる奴等って、やっぱエロいの期待してんだろ？それでチンポおっ勃てて待機してんだろ？ひひっ、期待していいぜ。今日は俺様が、お前らが今まで絶対見たことねえとんでもねえ映像見せてやっからよ。…よし。じゃあ、お母さん達…出てこいや！」

「はぁ～～い♪」

千尋と美佐枝は、テルが構えるカメラの前に仲良く現れた。そしてそのまま、テルの家のリビングの壁をバックに二人並んで立つ。

「よし。じゃあ自己紹介しろ、ババアども」

「はい。茂野美佐枝、四十歳です。職業は専業主婦です。主人はパティシエで、茂野晴夫といいます。子供は息子が一人いて、名前は茂野悠真です」

「谷山千尋、同じく四十歳で、専業主婦です。

主人は会社員で谷山龍彦。私も息子が一人いて、谷山大といいます」

「いひひ、いいねえ～。生配信で今これ全世界に公開してるっていうのに、個人情報明かすことになんの躊躇いもなし♪ふふ、肝が据わってるね～お母さん達！あはは！」

テルがすこぶる野卑な顔でおかしそうに笑う。こういった生配信は、少なからず素性を隠匿して行うのが常だが、二人は個人情報だけでなく、マスクもなにもせず顔面もそのままに晒していた。

時刻は夜九時。多くの視聴者が集まる人気動画サイトの生配信に、二人のお母さんは特に洒落っ気もないブラウスとジーンズの普段着で、普通に登場していたのだった。

「ふふ…じゃあ全世界に向けて、さらに個人情報垂れ流しちゃうか！じゃあ、美佐枝さん？今からちょっと質問するから正直に答えてね？」

「はい。わかりました」
ショートボブヘアーと眼鏡の美佐枝は、微かに嬉しそうな表情を浮かべて承諾する。
テルがカメラを覗きながら質問する。
「専業主婦で子供もいる茂野美佐枝さんは……不倫してますか？」
美佐枝は即答する。カメラにしっかり面を向けて。
「はい♪わたくし、茂野美佐枝…不倫しています☆」
躊躇いのない大きな笑みで顔をくしゃっと歪め、平気でそう言っていた。
「ぎゃはは！じゃあ千尋さんは？同じ専業主婦の谷山千尋さんはどうなの？不倫してるの？」
ショートカットがボーイッシュな千尋も簡単に答える。
「はい♪勿論わたくし、谷山千尋も…不倫して

います☆」
千尋も美佐枝に倣い、ニッコリと笑顔を輝かせた。
「あははは！すげー！言いやがったこいつら！マジキチガイじゃん！これ、今生配信で全世界に流れてんだぞ？録画されてネットにバラ撒かれでもしたら、旦那と息子に見られちゃうかもしれねえんだぞ？っていうか、ひょっとすると今リアルタイムで見られてる可能性だってあるんだぞ？いいのかよ！わかってんのか？おい、お母さん達よお！」
「はい、勿論わかってます♪…でもそれがどうしたんですか？家族にバレようがどうしようが、私達が不倫してる純然たる事実は変わらないじゃないですか？」
「そうですよ♪不倫してるから不倫してるって、ただ正直にそう答えただけですけど？」
お母さん達は、決して許されるはずがない秘

密を暴露したというのに、なんら悪びれることなく平然としているのだった。
　そればかりか…。
「だから…何度でも言います。…わたくし、茂野美佐枝は不倫しています。茂野美佐枝は不倫しています。茂野美佐枝は家族を裏切って浮気セックスしまくっています。茂野美佐枝は家族を裏切って浮気セックスしまくっています」
「私も…わたくし、谷山千尋は不倫しています。谷山千尋は不倫しています。谷山千尋は家族を無視して浮気交尾に明け暮れています。谷山千尋は家族をほったらかして浮気チンポを食べまくっています」
　まるで社会常識や道徳を挑発するかのように、二人のお母さんはカメラ目線で堂々と不貞を開示するのだった。
　とても真面目な表情と口調で…。

「ぎやはははは！だからマジで旦那と息子が見てるかもしんねえんだって、これ！いいのかよホントによお！あはははは！ああ、じゃあもう思い切って、お前らが今日なんも言わず家にほったらかしにしてきた旦那と息子が、今ホントにこの配信見てると思って、カメラ見て家族に向けて不倫告白してみろ！」

千尋と美佐枝は、そんな突飛な要求にも躊躇なく追従する。

「はい。…あなた～悠真～見てますか～？お母さんよ～？あなた～悠真～お母さん、実は不倫してるの～♪毎日不倫エッチしまくってるの～♪ごめんね～♪」

「大～あなた～見てる～？お母さんですよ～♪真面目で厳しくて怒りっぽいお母さんですよ～♪二人の真面目で厳しいお母さんは～二人を余裕で裏切って不倫してまぁ～～す♪罪悪感も、やめるつもりも、一切ございませ～ん

♪二人の大切なお母さんは…不倫が大好きでございまぁ〜〜す☆☆☆」
「ぎゃはははは！すげえ！ガチですげえこいつら！マジキチガイなんですけど！…うわ！すげえ視聴者数！コメントも超荒れてんじゃん！」
二人のお母さんをカメラで撮影するテルが、ノートパソコンに目をやり驚きの声をあげる。
「ひひ、これはネットでちょっとした騒ぎになるな。リアルに旦那と子供にバレるかもしんねえぞ…でも、いいんだよな、二人とも？」
「はい。バレても全然平気です。私達、もう家族とかどうでもいいんです」
「うん。不倫バレもう全然オッケーです♪どうぞバレてくださいって感じ(笑)♪あは♪」
「ひゃはは！いいね〜、じゃあもう思い切ってどんどんいくぞ。世界に生配信してる状態で、もうガンガンに最低本性をさらけ出せドエロ